

# 心筋梗塞と脳卒中 広報げろ 2008.3

## 心筋梗塞と脳卒中

心筋梗塞と脳卒中は日常生活の中で起こりうる病気の中で最も緊急に治療が必要なものでしょう。

心筋梗塞は心臓の筋肉を栄養する血管が詰まって血液の流れが途絶えて心筋が壊死してしまう病気です。心筋梗塞になるとその三割から五割が死亡し、死亡例の六割から七割は1～2時間以内に病院に着くまでに死亡しています。助かっても一度壊死した心筋は元には戻らないのでその程度によってさまざまな後遺症を引き起こし、日常生活に大きな影響を及ぼします。治療は一刻も早く血液の流れを再開させることで、治療が早ければ早いほど助かる確率も高くなり、後遺症も少なくなります。心筋梗塞の三分の二は胸の痛みなど、狭心症の症状がありますが三分の一はまったく症状がなく突然発症します。心筋梗塞の原因は動脈硬化です。動脈硬化を引き起こすのは肥満、喫煙、高血圧、糖尿病、ストレスなどです。南飛騨地域の医療環境では心筋梗塞に十分な対応ができないこともあるので動脈硬化の予防のための自己管理が大切であると共に狭心症が疑われたら医師による指導、管理を受けるべきでしょう。また、常時対応できる病院の整備が望まれます。

脳卒中は日本人の死因の中で癌、心臓病に続いて第三位となっています。脳卒中には血管が破れて起こる脳出血とクモ膜下出血（脳動脈瘤の破裂）、血管が詰まって起こる脳梗塞があります。脳出血は高血圧、糖尿病、高脂血症などで血管がもろくなって破れて起こるもので特に前ぶれ症状はなく突然起こります。くも膜下出血は脳の血管の分岐部にできた動脈瘤が破れて起こり、突然の頭痛を前ぶれとすることがあります。脳梗塞は高血圧などで血管内腔が狭くなって詰まるラクナ梗塞、動脈硬化、糖尿病などで血管内壁が破れてできる血栓が詰まるアテローム血栓性脳梗塞、心臓の拍動が乱れることによって心臓内にできた血栓が脳血管に流れ込んで詰まる心原性脳梗塞があります。現在では脳卒中の中でも脳梗塞が多く、その一割程度は入院中に死亡し、一割程度は症状を残さず回復します。残りは何らかの症状を残すことになり、治療開始が早いほど後遺症も少なくなります。治療はいかに早く血流を再開させるかが重要で、現在効果があるとされている薬剤（t-PA）は発症後三時間以内に特別な監視の下で使わなければなりません。この治療は現在下呂病院脳神経外科でも行われていますが担当医師による常時監視が必要で医師不足の折大変な労力を強いられています。

これらの病気はなった当事者でないと搬送や治療、後遺症のつらさ、地域医療体制の不備を痛感できないでしょう。しかし明日はわが身なのです。心筋梗塞、脳梗塞の治療を受けるための医療環境には大きな地域格差があります。住民の皆さんすべてが安全に安心して地域で生活していくために医療体制に目を向けその整備改善のために行動していただきたいものです。

下呂市立金山病院 院長 古田 智彦